

東洋文化史大系

宋元時代

京都帝國大學教授
文學博士

羽田

亨監修



誠文堂新光社

昭和十三年一月二十五日印刷
昭和十三年一月三十日發行

東洋文化史大系

宋元時代

編纂者

小沼勝衛

東京市神田區錦町一ノ五
株式誠文堂新光社

右代表者 小川菊松

發行者

東京市小石川區久堅町二〇八
君島潔

印刷所

東京市小石川區久堅町二〇八
共同印刷株式會社

發行所

株式會社
誠文堂新光社

東京市神田區錦町一丁目五番地
電話神田一自二二一至二二六一九番
振替東京四五三四〇番

宋元時代

目次

一、總說

羽田亨

宋元時代といふ區分

庶民階級の擡頭	二
貴族制度下の國家・社會	二
貴族政治の崩壊	三
庶民擡頭の黎明期	三
安史の亂と社會の變革	四
太祖の抑武と君主權の伸張	四
宋代における文化の普及と生活の向上	五
北方民族の發展	六
北族の民族的自覺と文化の發達	六
宋の文治主義と北族の侵入	七
元時代	八
北族勢力の極盛期	八
元の一統の意義	八
元代の政策と社會	九
蒙古至上主義	九
元代社會における漢民族	九

一、五代の紛争と宋の統一

那波利貞

群雄割據の形勢

諸國の興亡	一六
地方的平和と地方的文化	一七

四、北宋の黨爭

宮崎市定

唐宋文化の過渡期の現象	一三
儒學	一五
文學	一五
繪畫	一五
音樂	一五
工藝	一五
趙匡胤の君臨	一四

黨爭前史

宋初の黨爭	一五
樸議	一五
王安石の改革	一五
王安石の抜擢	一五
均輸及び青苗、市易法	一五
保甲及び保馬法	一五

四、北宋の黨爭

李繼遷の叛亂	四四
西夏の建國	四五
その後の兩國關係	四五
仁宗時代の内治	四五

宋の統一	一〇
宋の太祖の人物と事業	一一
元	一一
宋と遼との關係	一二
宋の太宗の北征	一二
澶淵の役	一二
真宗の内政	一二
宋と西夏との關係	一二
李繼遷の叛亂	一二
西夏の建國	一二
その後の兩國關係	一二
仁宗時代の内治	一二

遼金の對漢族態度	一一
東亞における漢文化の位置	一二
蒙古族と漢文化	一二
蒙古族が固有文化を保持したる所以	一二
交通の發達	一二
東方の統一と海陸交通の發達	一二
交通發達に伴ふ東西文化の交渉	一二

宋の統一	一〇
宋の太祖の人物と事業	一一
元	一一
宋と遼との關係	一二
宋の太宗の北征	一二
澶淵の役	一二
真宗の内政	一二
宋と西夏との關係	一二
李繼遷の叛亂	一二
西夏の建國	一二
その後の兩國關係	一二
仁宗時代の内治	一二

宮崎市定

新舊黨爭時代	一
新法の批判	一
募役法	一
新法の批判	一
蒙古至上主義	一
元代社會における漢民族	一

舊法黨の擡頭	空
新法黨の復活	空
蔡京の專權	空

蒙古族と遼金との關係	六八
蒙古族と塔々兒郡との關係	六八
成吉思汗の功業	八八
鐵木真の苦難と初度の即位	八八
鐵木真再度の即位	九〇
成吉思汗創始の制度	九〇
成吉思汗の外征	九一
諸王分封とクリルタイ	九一
成吉思汗の死	九一

日本征伐と南海經略	一〇四
元帝國の政治一斑	一〇五
元朝の政局	一〇五
元朝の外民族及び外國文化に對する態度	一〇七
世祖時代の財政	一〇九
海都の亂	一一二

五、宋金の抗爭

曾我部 靜雄

金の勃興と北宋・遼の衰亡	空
女眞の勃興	空
金の建國	空
宋金の同盟と遼の衰亡	古
靖康の變	古
宋金の和戰	古
宋金の和と秦檜の專權	古
宋の孝宗と金の世宗	八
韓侂胄・史彌遠の專政	八

六、蒙古の勃興

鴛淵 一

太宗・定宗・憲宗時代	齒
太宗窩闊台の即位	齒
太宗の奠都と朝禮	齒
站赤の制定	九
太宗の四功四罪と耶律楚材	九
金の滅亡と拔都の西征	九
定宗及び憲宗時代	九

七、蒙古の統一

鴛淵 一

成宗朝以來の概觀	一三
歷代諸帝の治績一斑	一三
王位繼承の紛擾と權臣の跋扈	一四
多年に亘る内亂と權臣の跋扈	二七
喇嘛教の信仰と喇嘛僧の跋扈	二八
財政紊亂	二九
漢人の抑壓と不平反感の勃發	二九
元朝の滅亡	二九
元末の内亂	二九
元室の内訌	二九
明軍の北上と大都陥落	二九
北遷後の元朝(北元)	二九
高麗の服屬	二九
結語	二九

蒙古族の原住地	全
蒙古族の開國傳說	全

南宋の滅亡	一〇一
-------	-----

八、元朝の衰亡

鴛淵 一

蒙古族の漢族漢文化支配	全
蒙古族の起源	全
蒙古族の原住地	全
蒙古族の開國傳說	全

九、宋元時代の東西交通

秋 貞 實 造

序 説	一四
海上交通	一四
大食人の勢力	一四
支那及びペルシャ海岸における東西	一四
代表的貿易港	一四
東西航路と船舶	一七
南方の航路と港	二七
支那船の交通	二九
外國貿易	三〇
貿易品及び市舶司の職掌	三〇
關稅及び專賣品	三〇
陸上交通	三一
遼と西方との交通	三一
漢北時代及び元代の陸上交通	三一
陸上交通路	三四

一〇、宋元の經濟的狀態

宮 崎 市 定

近世的社會形態	二二
天子獨裁權の發達	二六
士大夫階級成立	二八
支那都市の膨脹徑路	二九
唐宋時代の地方都市の計畫樣式	二九
北魏東魏隋唐の新首都計畫	二九
支那古代都市の膨脹趨勢	二九
唐宋時代の草市の發達	二九

一一、都市の發達と庶民生

那 波 利 貞

支那における都市の定義	一五
支那都市發生存立の趨勢	一五
支那古代都市の廣袤	一五
支那古代都市分布の形勢	一五
支那中世近世都市分布の形勢	一五
庶民生活の向上	一九
都會的風尚の橫溢	一九
精神的生活の向上	一九
物質的生活の向上	一九

麓 保 孝

概 觀	一一
序 言	一一
宋元儒學の大觀	一一
宋代の瓦市の發生	一四〇
漕運と國都	一四〇
兩稅法と專賣制度	一四〇
通 貨	一四〇
宋元の社會經濟	一四一
小作樣式の流行	一四一
社會の分業化	一四一
支那中世都市の坊制	一四一
宋代都市における坊制の頽壞	一四一
都市内一般の普遍的商業化	一四一
店鋪樣式の變化	一四一
庶民生活の社會的擡頭	一四一
宋代都市における酒樓茶坊の發達	一四一
庶民階級の趣味の向上と娛樂の發達	一四一
廟制の發生	一六
上水道の考案	一七
消防火機構	一八

一二、儒學の興隆

近世的社會形態	二二
天子獨裁權の發達	二六
士大夫階級成立	二八
支那都市の膨脹徑路	二九
唐宋時代の地方都市の計畫樣式	二九
北魏東魏隋唐の新首都計畫	二九
支那古代都市の膨脹趨勢	二九
唐宋時代の草市の發達	二九

北宋儒學

宋初の動向	二〇四
慶曆の正學	二〇六
周程の理學	二〇八
南宋儒學	二一〇
朱子の集成	二一〇
宋末元代の一瞥	二一三
結語	二四

一三、文學の發達

長澤 規矩也

散文	二五六
古文の復興	二五六
歐曾王蘇	二七
その他の古文家	二七
宋の文體	二八
宋の四六文	二九
元の散文	二九
詩詞	二九
佛教	塚本善隆
宋の詩壇の大勢	二一〇
北宋の詩壇	二一一
江西詩派	二二
陸范楊尤	二二三
永嘉四靈派と江湖派	二二三
理學者と慷慨家の詩	二三三

遼金の詩	二三四
元の詩壇	二三四
北宋の詞壇	二三四
南宋の詩界	二四五
文學評論	二五
民衆娛樂の發達	二五六
大唐三藏法師取經記	二五六
宋元の講史書	二五六
宋元の話本	二七〇
宣和遺事と傳奇小説	二七〇
戲曲	二七一
元曲の勃興	二七一
元曲の作者作品	二七一
戯文の復興	二七一
散曲	二七一
喇嘛教	岩井大慧
西藏國へ佛教輸入の傳說	二七四
西藏初期佛教と喇嘛教	二七五
喇嘛教と元の宮廷	二七六
喇嘛教の隆昌とその横暴	二七六
西藏一切經とその價値	二七七
喇嘛教とその文化	二七七
喇嘛教とその文化	二七七
シヤマン教	岩井大慧
シヤマン教について	二七九
シヤマンといふ言葉の意味	二七九
シヤマン教の信仰對象	二七九
シヤマンの性能	二七九
シヤマン教の展開	二七九
シヤマンの用ふる器具	二七九
元代シヤマン教における拜天拜地の風	二七八

—— 4 ——

日月星辰山水火風の崇拜……………二六

蒙古人の供犠……………二七

蒙古民族のシャマン尊崇……………二八

道教……………久保田量遠……………二九

宋代道教の位置……………二八

宋代道教の興隆……………二九

全真教の創始……………二九

全真教の根本思想……………二九

元代道教の盛行……………二九

道藏の雕印と石窟の開鑿……………二九

全真教の状勢……………二九

その他の諸宗派……………二九

道教と佛教との角諍……………二九

耶蘇教……………右田幹之助……………三〇

概観……………三〇

宋元の間ににおける西北邊疆の耶蘇教……………三〇

元代におけるネストル派の再盛……………三〇

ネストル派教士の西歐奉使……………三〇

フランチエスコ派の傳道……………三〇

回教……………右田幹之助……………三一

唐代の回教……………三一

宋代の回教……………三二

ウイグル民族と回教……………三二

元代の回教……………三三

アラビヤ學術の影響……………三四

文字の創製……………三五
實錄(國史)の編纂……………三六

一五、北方民族と支那文化……………三七

秋貞實造

一六、繪畫……………伊勢専一郎

伊勢専一郎

五代……………三八

五代繪畫の位置……………三九

中原の水墨畫……………三九

蜀と南唐の花鳥畫……………三九

移民政策と州縣の増置……………三九

都市の發達と交通……………三九

制度と文學……………三九

佛教の流傳……………三九

遼の滅亡と靖康の變……………三九

北齊の廢亡と宋金國界の劃定……………三九

海陵の燕京遷都……………三九

猛安・謀克を中心とする移民政策……………三九

文學及び儀禮……………三九

世宗の國粹保存政策……………三九

南宋……………三九

南渡後の大要……………三九

畫院の隆盛……………三九

元……………三九

院體打破の運動……………三九

元末の四大家……………三九

(目次了)

挿畫目次

原色版
徽宗筆桃鳩圖
ダブルトン
遼の聖宗皇帝の哀冊文並びに篆蓋
契丹文字の哀冊と篆蓋
南宋時代平江府圖碑拓本
元代司天の遺址・簡儀

一、總說

北京の貢院	三
北人狩獵の圖	四
契丹人畫像	五
契丹の山水畫	六
金代の佛像	七
宋神宗畫像	八
元代の聖旨牌	九
蒙古人の辯髮	十
成吉思汗聖旨の牌札	十一
元彌六書統	十二
宋徽宗筆鴉水仙圖(一頁大)	十三
蒙古人狩獵の圖	十四
宋太祖畫像	十五
宋太祖陵前の石像	十六
宋太宗像	十七
宋太宗永熙陵前の石獅	十八
宋真宗畫像	十九
宋真宗皇后畫像	二十
泰山の頂上	二十一
西夏の都興慶址	二十二
宋真宗泰山行幸跡	二十三
范仲淹及び范純仁畫像	二十四
宋仁宗畫像	二十五
韓琦畫像	二十六
西夏時代の壁畫	二十七
宋仁宗永昭陵	二十八
宋英宗畫像	二十九
宋英宗高皇后畫像	三十
宋英宗永厚陵	三十一
宋度宗畫像	三十二
王安石畫像	三十三
歐陽脩畫像	三十四
後蜀黃筌筆柳塘聚禽圖卷	三十五
俗文場茶酒論	三十六
唐末五代の印刷物觀世音菩薩印本	三十七
絹本着色觀世音菩薩畫像	三十八
聖觀自在菩薩印本	三十九
唐末五代の印刷物觀世音菩薩	四十
俗文場茶酒論	四十一
徐崇嗣筆雙兔圖卷	四十二

關係

董源筆谿山行旅圖	三〇
キチル地方で發見された佛壁畫	三一
年紀ある支那最古の紙片	三二
清の乾隆年間仿製の澄心堂紙	三三
前漢末新莽時代墨書の玉門關關係文書	三四
漢代墨書の名刺	三四
杭州西湖タ畔雷峰塔	三四
南宋時代平江府圖碑拓本	三四
元代司天の遺址・簡儀	三四

三、宋と遼・西夏との關係

司馬光畫像	五九
王安石筆蹟	六〇
蘇東坡讀書樓	六一
宋哲宗畫像	六二
宋哲宗孟皇后畫像	六三
宋徽宗墨蹟	六四
蔡京筆蹟	六五
元祐黨籍碑	六六
宋欽宗畫像	六七
五國城址	六八
蒙古太宗の像	六九
蒙古太宗弟拖雷の獻杯を受くる圖	七〇
額爾尼招城外風景	七一
蒙古太宗窩闊台汗その血族を招致しヤサックを示す圖	七二
ワールシタット拔都西征役戦歿者	七三
記念會堂	七四
拔都西征軍リーダーの城壁に迫る圖	七五
金太祖陵	七六
西湖	七七
宋高宗畫像	七八
岳飛像	七九
岳王墳墓	八〇
秦檜夫妻鐵像	八一
玉泉躍魚	八二
三潭印月	八三
大散關	八四
吳山第一峰	八五
錢塘江の大潮	八六
錢塘江の上流	八七
宋孝宗畫像	八八
宋理宗畫像	八九
南宋の太學	九〇
上天竺寺	九一
宋理宗畫像	九二
理宗陵	九三
南宋六陵	九四
元代楮幣(一)	九五
元代楮幣(二)	九六
元代楮幣(三)	九七
蘇溝橋現景	九八

五、宋金の抗争

元世祖の像	九九
元代の上都開平府城址	一〇〇
元大都地圖	一〇一
北平古今圖	一〇二
元大都古城壁	一〇三
蒙古時代武裝騎士圖	一〇四
蒙古軍戰艦に乗じて日本西邊を侵す圖	一〇五
厓山の圖	一〇六
竹崎秀長蒙古襲來繪詞	一〇七
伊兒汗の國書	一〇八
元代楮幣(一)	一〇九
元代楮幣(二)	一一〇
元代楮幣(三)	一一一

七、蒙古の統一

六、蒙古の勃興	五九
盧集筆蹟	六〇
八、元朝の衰亡	六一
董源筆谿山行旅圖	三〇
キチル地方で發見された佛壁畫	三一
成吉思汗及び李兒帖夫人二子を引見する圖	三二
甘肅省固原縣六盤山	三三
察合台汗宰相ヴァヂールを刑する圖	三四
蒙古太祖第四子拖雷とその第一夫人	三五
蒙古太宗窩闊台汗その血族を招致しヤサックを示す圖	三六
ワールシタット拔都西征役戦歿者	三七
記念會堂	三八
拔都西征軍リーダーの城壁に迫る圖	三九
金太祖陵	四〇
西湖	四一
宋高宗畫像	四二
岳飛像	四三
岳王墳墓	四四
秦檜夫妻鐵像	四五
玉泉躍魚	四五
三潭印月	四六
大散關	四七
吳山第一峰	四八
錢塘江の大潮	四九
錢塘江の上流	五〇
宋孝宗畫像	五一
宋理宗畫像	五二
南宋の太學	五三
上天竺寺	五四
宋理宗畫像	五四
理宗陵	五六
南宋六陵	五六
元代楮幣(一)	五六
元代楮幣(二)	五六
元代楮幣(三)	五六
蘇溝橋現景	五六

吳鎮筆山水
元開元路段背印的圖
明太祖元璋的像
元應昌城遺壁南面
蒙古包

拉薩喇嘛教總本山
元開元路段背印的圖
明太祖元璋的像
元應昌城遺壁南面
蒙古包

九、宋元時代の東西交通

- 中世の南海船
中世の船
元代の軍船
南支の渡船
元朝國書長牌
元代海青牌の拓本
蒙古の銀牌
蒙古の銀牌
元朝の圓牌
マルコ・ポーロの肖像
マルコ・ポーロの宅址
マルコ・ポーロの世界地圖
マルコ・ポーロの東方見聞錄
支那都市城外の小市場
北平朝陽門外
宋の南京應天府圖
西夏時代の壁畫
北平正陽門外大街
北平正陽門內內景
宋行在臨安城市圖
支那傳統的首都計畫樣式圖
北平東四牌樓の大市街
北宋東京開封府內城圖
北宋東京開封府内外城圖
北平正陽門甕城內內景
宋之南京應天府圖
西夏時代的壁畫
北平正陽門外大街
支那都市城外的小市場
北平鼓樓大街
支那現代的演劇
杭州的茶館
街頭的紙鳶商人
北平鼓樓大街
支那現代的演劇
杭州的茶館
南宋時代布畫商人圖(一貢大)
卜算先生的錢店
北平鼓樓下的露天市場
扇子貼換商人的移動店鋪
支那現代都市街頭風景
木材店的牌坊
支那的樂器鋪
雜藝人
北平的絲帶店
現代支那馬具屋的招牌
雜藝人
獄簷書院
文丞相祠
白鹿洞書院(一)
白鹿洞書院(二)
岳王廟
論語集注
白鹿洞書院(一)
白鹿洞書院(二)
太極圖
岳王廟
陳古靈集
范文正公祠
資治通鑑
三蘇的故宅
全相平話(一)
玉海宋朝石經
范文正公祠
宋史忠義傳序
宋名士の筆蹟
三禮圖
太平御覽
玉海宋朝石經
范文正公祠
資治通鑑
三蘇的故宅
全相平話(一)
金相平話(二)
至元刊本全相三分事略
太平廣記
全相平話(二)
元代戲臺
明容與堂刊本西廂記
漢宮秋
蔡中郎忠孝傳
吳越王錢弘叔造舍利塔
江西省廬山の虎溪
金刻本「大中祥符法寶錄」
蜀版大藏經
南宋版大藏經
南宋思溪版大藏經
石經山の石室と雲居寺
最澄の度牒
杭州靈隱寺大殿と大殿前の九層塔
現代支那の歌妓
杭州西湖畔の茶坊
北宋東京開封府城朱雀門外圖
北平東四牌樓猪市大街の豚市
杭州西湖畔の茶坊
現代支那の歌妓
景德鎮窯場の燒窯
磁州彭城鎮
金元の通貨
宋の折二錢及び大錢
景德鎮窯場の燒窯
景德鎮窯場
端溪硯
新唐書上表
王文公文集

一一、都市の發達と庶民生活の向上

- 賣書籍的露店
支那現代的演戲
玩藝人
北平東四牌樓北の歲末賣出し
賣湯店
南宋行在臨安城市圖
支那的燈心行商人
北平雅和宮の打鬼會
宋代官窑の作品
宋代龍泉窑の作品
江西省九江の陶盞器店

- 賣書籍的露店
支那現代的演戲
玩藝人
北平東四牌樓北の歲末賣出し
賣湯店
南宋行在臨安城市圖
支那的燈心行商人
北平雅和宮の打鬼會
宋代官窑の作品
宋代龍泉窑の作品
黃庭堅筆王長者墓誌銘稿
黃陳詩集序
誠齋集
永嘉四靈詩
趙孟頫筆枯樹賦
白石道人歌曲
民衆娛樂
大唐三藏法師取經記
大藏經
支那現代的演劇
杭州的茶館
街頭的紙鳶商人
北平鼓樓大街
支那現代的演劇
杭州的茶館
南宋時代布畫商人圖(一貢大)
卜算先生的錢店
北平鼓樓下的露天市場
扇子貼換商人的移動店鋪
支那現代都市街頭風景
木材店的牌坊
支那的樂器鋪
雜藝人
北平的絲帶店
現代支那馬具屋的招牌
雜藝人
獄簷書院
文丞相祠
白鹿洞書院(一)
白鹿洞書院(二)
岳王廟
論語集注
白鹿洞書院(一)
白鹿洞書院(二)
太極圖
岳王廟
陳古靈集
范文正公祠
資治通鑑
三蘇的故宅
全相平話(一)
金相平話(二)
至元刊本全相三分事略
太平廣記
全相平話(二)
元代戲臺
明容與堂刊本西廂記
漢宮秋
蔡中郎忠孝傳
吳越王錢弘叔造舍利塔
江西省廬山の虎溪
金刻本「大中祥符法寶錄」
蜀版大藏經
南宋版大藏經
南宋思溪版大藏經
石經山の石室と雲居寺
最澄の度牒
杭州靈隱寺大殿と大殿前の九層塔

一二、儒學の興隆

- 宋史忠義傳序
宋名士の筆蹟
三禮圖
太平御覽
玉海宋朝石經
范文正公祠
資治通鑑
三蘇的故宅
陳古靈集
范文正公祠
資治通鑑
三蘇的故宅
全相平話(一)
金相平話(二)
至元刊本全相三分事略
太平廣記
全相平話(二)
元代戲臺
明容與堂刊本西廂記
漢宮秋
蔡中郎忠孝傳
吳越王錢弘叔造舍利塔
江西省廬山の虎溪
金刻本「大中祥符法寶錄」
蜀版大藏經
南宋版大藏經
南宋思溪版大藏經
石經山の石室と雲居寺
最澄の度牒
杭州靈隱寺大殿と大殿前の九層塔

一三、文學の發達

- 新唐書上表
王文公文集

地圖目次

一部……
(寫真目次了)

宋元時代の支那(巻末色刷)
宋元時代のアジャ(巻末色刷)
元舊都和林地圖

(地圖目次了)



幕帳るけおに方地古蒙世中

系大史化文洋東

代時元宋

京東方文化研究所員院	文大正大學教授	文東洋文學士庫	京都方文化研究所員院	法政大學講師	大谷大學教授	廣島文理科大學士學	東北帝國大學助教	第三高等學校教授	京都帝國大學助教	文學博	京都帝國大學助教
研究文化所學員院	文大正大學教授	文東洋文學士庫	京都方文化研究所員院	法政大學講師	大谷大學教授	廣島文理科大學士學	東北帝國大學助教	第三高等學校教授	京都帝國大學助教	文學博	京都帝國大學助教

伊勢專一郎	久保田幹之	石井量助	岩本隆慧	塚善遠	麓也	長澤規矩	秋保	鴛實	曾我部靜雄	那波利亨	羽田貞定
(執筆順)											

一、總說

宋元時代といふ區分

題して宋元時代といふ。宋といひ元といふも、それが時の流れと事象の發展を遮断して、異なる時、處、人を創造したるものに非る以上、五代に唐に隋に、更にまたその昔に溯らずして究明し得る史實は存しない筈である。しかしながらこれ等兩朝時代に認められる主要なる史實を主題として、これが生成發展の跡を論究するすれば、縱令その以前に立返つて放究を施すところ少からぬにしても、必ずしもこれを兩朝時代の歴史と稱するを妨げない。この一篇の論述が屢々宋元時代以外に及びながら、なほ冠するに兩代を以てするのは、かゝる見解に基くものに外ならぬ。

宋元兩時代を一つに併せたのは、一に編纂の便宜に出たものであらうと思ふ。自分は兩時代の文化現象を一纏にして論述することに、格別の意義を附し得るとは考へない。たゞ北方において、遼、金にと漸次展開し來つた北人の勢力が、元に至つてその極點に達したのに對して、南方において常にこれと對立し交渉を有したのが宋朝であつた關係からすれば、この組合せ方ににおいても必ずしも理無しとはしない。しかもこれが爲に兩代の文化現象の上に、特に一括せらるべき體系が存するものと考ふべきでないことは斷つて置かねばならぬ。

兩漢・六朝から隋・唐にかけて、國家の政權は貴族の間に掌握せられたもので、君主も貴族の一員としてその位に在つたに過ぎず、從つてその君主權は貴族間から多くの掣肘を加へられ、獨裁君主の實を有するものでなかつたといふのが近時の學界の通説である。この見方にはこの期間中のそれぞれの時代と事情とに由つて或る程度の制限を附せなければならぬとしても、大體においてそれが當を得た説であることは認めなければならぬ。國家の政權が貴族に壟斷せられてゐたと共に、當時社會においても貴族は平民の上に特權階級として位し、いはゆる士庶の流別は厳重に規定せられて混淆を許さず、庶民は超ゆるを得ざる社會的分限の下に、擡頭の機會も無き境涯に放置せられ、抑壓せられてゐたと見るこ

とも、またもとより動かし難き見解である。
かゝれば當時一般庶民は國家の政治とか、社會生活の向上とかに關しては沒交渉で、たゞ治者たり特權者たる貴族階級の下に在つて、その驅使に任ずるだけの存在に過ぎなかつた。尤もこの間、彼等の間にも世の變亂に乗じて、若しくは變亂を生ぜしめて、自から進出の境地を拓いたものが無いではない。しかしこれは稀なる場合であつたのみならず、彼等はかくして新たなる貴族として家を興し、從來の貴族特權階級の班に加はるに至つたに外ならぬのであつて、一般庶民の國家社會における位置は、これが爲に何等變改せられたのではない。しかるにこの情態に漸次變化を生じ、庶民階級が國家社會の機構における一要素として擡頭進出するやうになつたのは、極めて著しき世態の變遷といはなければならぬ。

貴族政治の崩壊

ところでこの變化は庶民が自から覺醒して貴族に迫り、不當の特權を剥奪したといふやうな事情に因つたのではなく、實に貴族政治の制度自體の中から發生したものに外ならぬ。凡そあらゆる官階がそれぞれ貴族

庶民階級の擡頭



院貢の京北
あるで室たし心苦に製作答者著者

中の家柄の高下に従つて割當されたことは、更めていふまでもなく、魏晉以来中正制度を探つた貴族政治の特徴であるが、貴族の間にも人格と見の優秀なものもあれば陋劣なものもある。それで家柄に應じて官吏を任用しながらも、なるべくは人物の優れたものを詮用したいといふ傾向の生じて來るのは當然のことであつて、それが遂に南北朝の末頃から官吏詮考の方針として爲政者の間に認められることになつた。

しかるに人物を見定めて賢良の士を擢用するといふ方針は、門閥による任用の精神とは全く背馳するものであつて、縱令當初はかくして貴族中より人材を擧用する方針なり實情であつたとしても、一旦人材擧用といふことに重要な意義を附した以上、その擧用の範圍が貴族以外庶民の階級の中にも及んで行くべきことは必然の勢といはなければならぬ。隋の時に至つて科舉の制度が建てられ、試験の方法に依つて、士庶を問はず一般の間から人材を選択することになり、公然と庶民の政治機関に携はる途の開かれることになつたのは、即ちかかる勢の自然に到達すべき境地であつたと見なければならぬ。従つて貴族政治を崩壊せしめたものはそれ自らの作用に外ならぬのであつて、庶民階級が自から働きかけて收め得た結果ではないのである。

それは兎も角、この庶民階級の國家社會の機構への進出は、實に史上における中世期と近世期とを分つべき顯著なる事象と認めて差支ない。しかし隋の時代に一旦かかる途が開かれたからといって、こゝに從來の國家社會の組織が忽ちにして一變して、庶民飛躍の時代を現出したのではない。人材擧用の爲に科舉の制度が建てられて、無論官吏の總べが科舉の出身に限られた譯ではなく、また門閥尊重の觀念が俄かにこれが爲に消滅する筈もない。ただ名門貴族でなければ國家社會の上に立つて地位を得ることができなかつたのが、この後庶民でもその位置に上り

庶民擧頭の黎明期

得ることになつたといふに過ぎない。
従つてこの庶民進出の途の開かれたことは、極めて重要な意義を有する。と共に、なほ單に國家社會の組織の變革の上における黎明の鐘たるに外ならない。しかばこの黎明の幕が捲き揚げられていよいよ今は、ゆる近世期の光景の演出されたのは何時からのことと認むべきであらうか。

安史の亂と 社會の變革



圖の獵狩人北

唐は幹韓あるあでのも、るらせ所と筆の幹韓し題と圖の獵射子軍。る待し像想を俗風獵狩の人北の時當。たつあで手名く畫を馬に特で人の代時宗玄の。

宋時代

太祖の抑 權の伸張

唐の玄宗の天寶末以來八年間に亘る安史の大亂は例へば張り切つた腫物に切開の刀をあたものともいひ得られよう。凡そ病熱の爲に動かされてゐた活きが忽然として熄んだと共に、こゝに表された病體に負はされた瘡痍の爲に、新たに諸種の變調が現はれた。亂後の國家社會に發生した變革は即ち終し、社會の秩序は紊亂し、大義名分は地を攘ひ新ことに注意しなければならぬのは、個人の實力の表面に現はれである。就中注意しなければならぬのは、個人の實力の表面に現はれである。實際に當つて何等爲すなき門閥の權勢の如きは、先づ來つたことで、實際に當つて何等爲すなき門閥の權勢の如きは、先づ以て凋落すべき運命に遭遇し、統榜子弟の白面の前に、屑鐵にも譬へられた武人の跋扈跳梁が現出し、科舉出身の多くの逸材の聲譽は、また彼

等をして後へに陞若たらしめた。かくて大亂以前に重んぜられた貴族の系譜の穿鑿の如きはもはや政治上には顧られず、凡そ李氏といへば隨西、劉氏といへば彭城の出と誰彼の差別も無く稱することとなり、冠冕皂隸混じて一つとなつたといはれてゐる。されば若し貴族政治の衰亡・庶民階級の進出といふ觀點から近世といふ時期を區別するならば、正にこの大亂の終つた時を以てこれに當て然るべきであらう。



像畫人丹契
か畫に壁内陵王帝丹契の（者分西安興國洲滿）子塔白
無縫に頭るてれば現くよが風の悍精也（畫墨）像肯の人丹契るたれ
人のこ。るれらあ認がるてれき記の字文丹契にか微に肩右り被を帽
るれは思とのもたし記を名の物

せる舊との同僚諸將の手から兵力を奪ひ、遂に天下の兵權政權を國家に統一したのは、即ち長い間に亘つた世の亂離の姿を、秩序ある常態に引き戻すことのできた所以であつて、三百年の治を開いた基はこゝに建てられたものといはねばならぬ。

かくの如くにして宋代においては、前來述べた如く、曾て權勢を振つた門閥貴族は既に閉息し、また中唐以來引き続き跋扈を極めた武人も勢を失ひ、こゝに天子の政權の障礙となるものは悉く除かれたのであるが、更に太祖は制度の上からも帝權の強化において唐制の上に一步を進めたので、天子の位置權力は名實共に伸展して尊嚴を極むることとなつた。

文治は宋朝政治の精神であり、國初以來學問文藝の保護獎勵に力を用ゐたので、唐末以降萎靡して振はなかつた學術の研究は鬱然として興り、遂に支那の學術史上に特色ある宋學を開くに至り、文學美術の如きも隆盛を極むることとなつた。殊に注意しなければならぬのは、この時代においてこれら學問文藝普及の範圍が單に貴族の間とか、僅の讀書人の方に及ぶことになつたことである。かかる有様になつたのは、國家の學藝獎勵の大方針によると共に、五代以來分立した諸國の都を中心として、文化開化は地域の擴大されたこと、唐・五代から宋に入つて印刷術がいよいよ盛になり、書物を手にし易くなつたこと、宋の江南に遷つたこと、官吏の任用が科學の出身者を以てするを常道としたこと及びその他にも原因と考へべき諸種の事情を數へ得られるであらうが、これを要するに社會のあらゆる方面に庶民が進出し得ることになつたといふ一般的情勢から割出して考へられねばならぬことである。

宋代においては一般庶民の文化の程度が高まり、その生活が向上するに至つたことは、當時の無名の人々の墳墓から多數に發見せられる日用品の類からも如實に知り得られることで、學問文藝の普及もその一環であつた接觸に及ぼす影響によつて發達を阻害されたのを蒙ること少しき社會生活が、或は士庶の區別の爲に、あるいは世の動亂の直ぐに外ならないのであるが、この情態は從來彼等の文が、宋の一統天下の下に、平穏なさうして階級的抑壓の方面に漸次その水準線を上げて來たのに外ならぬ。そうしてこの一般社會の人々の中、志を有するものは争うて特に學問の研究に従ひ、科學に應じて立

身出世の道を求めるようとしたから、自然高等の教養ある人々が多數世に出ることとなり、そうして當然これ等の人々が社會の動きを導き、經濟化の進展など、相待つて、益々文化化の一般的普及發達の勢を生ぜしむるに至つたものである。若し中世期と近世期との區別を庶民階級の社會的進出といふ特徴に求めるとすれば、これを安史の亂後の時代に置き得べきことは前に述べたところであるが、別にこの特徴を君主權の伸展とか、文化の一般的普及とかいふ點に求めるとすれば、まさに宋代を以てこれに擬することが適切であると見なければならぬ。

北方民族の發展

北方民族の自覺と文化の發達

南北朝以來隋唐時代にかけては、北方においては突厥、回鶻等トルコ族の全盛時代で、その勢は蒙古から廣く中央アジアに及び、南に向つては漢族に對して大なる壓迫を加へた。しかしながら彼等の漢族に對する壓迫は、要するに物資の奪掠を目的としたのに外ならぬのであつて、或る程度にこの欲望を充たし得れば満足し、その以上彼等の生活に適應しない塞内の土地や人民を自から占領支配するには至らなかつた。



水山の描線あてれか畫に壁内陵王帝丹契の（省分西安興國洲溝）子塔白　畫水山の丹契
などの鳥・猪・鹿・木樹的な生寫に山たしは現で線いか柔るるあでのもたつ從に風雲の朱北で畫
爲に彼等の間にも勿論盛んであつた支配慾を、單に中國の饋與を貪るこ
とにおいて満足せしめ、それが不満足の情態に置かれた時に常習の侵寇

を演じたのである。

尤も五胡時代にも北人は漢土に入りて國を建て、北朝の魏の如きも北族の一種なる鮮卑種族の建設に係ることいふまでもないが、これ等は北人とはいひ乍ら、既に本地を去つて漢地に移り、その文化に育てられて、漢人と殆んど異なるところなき程度に化成されたものであつて、文化的の關係から見れば、實は漢人の支配と大して相違はなかつたのである。しかるに長い間に亘るかかる史上の常例を破つて、漢土の一部を領土とし、自からその統治に任ずる先駆を爲したのが契丹種族の遼である。古から溌洲に亘る領土の外に、漢土燕・薊の十六州を後晉から收め、た

とへ漢人の知識を採用したにしても、自から特種の制度を施してこれを統治し、文字の製作を始として、獨自の契丹文化を發達せしめた。これを從來の有様と比較して考へると、彼等はこゝに民族としての存立の自覺を生じたもので、漢文化に化成せずして漢人を治する獨立的立場を創したものと見なければならぬ。この勢に追随したもののが黨項族の西夏であり、女眞族の金である。西夏は河西地方の小地域に蟠居して、左大勢力には達しなかつたが、金は遼を倒してその領土を奪つた上に、その下に置かれることになつた。そうして金もまた遼以上にその民族獨自の文化の發展保存に力を用ひ、漢文化の外に立つて漢人を支配することに努力した。たゞへその努力に關係らず、彼等の漢文化に同化せられる勢は滔々として防ぐ可らざるものがあつたにせよ、彼等がその國勢の發展と文化の獨立とに意を用ひたのは、いはゞ遼から深く契丹族の遼と同じ、漢土を支配しながら深く民族的自覺を有してゐたものであることを認めなければならぬ。

宋の文治主義と北族の侵入

さて武人跋扈の宿弊を除くことに専念した宋の太祖が逸早く節度使を廢し、兵制を改革したのは、誠に當を得た處置と思はれるが、一利一害は數の免れぬところで、これが爲に武備が薄弱となり、北族の侵入を容易ならしめたことは争はれない。従つて論者は宋の衰弱の理由をこれに歸し、非難を加へるのであるが、これは武禍を除いて國體を固めようとした宋の國初の大方針との間に免れることのできない



聖三寺惠普縣同大省西山たれらて建に（三四一一紀西）年三統皇宗熙金 像佛の代金
あるで存遺るな重貴の術美教佛代金で一つの佛尊三るみたれらせ置安に内殿